

# 大東文化大学第一高等学校男子陸上競技部

## 東京都高校駅伝に向けて――

大東文化大学第一高等学校・男子陸上競技部は、明日（文化の日）行われる全国高等学校東京都高校駅伝・東京都予選に今回で三六回目の出場を迎える。この大会で優勝すれば年末に京都で行われる全国大会へ出場することが出来る。「都大路」と高校生ランナーは憧れ、たった一回のチャンスに全てをかけるのである。

今年の駅伝コースは従来のコースとは異なり、新たに組み直された新コースである。荒川河川敷の平坦で、一見走り易そうなコースに見えるが、このコースにはいくつものドラマがあった。平坦で、直線で、力の有る選手ならば最も力を出せる環境のように思える。しかし、一つ目の敵は風である。直線を往復するだけのコースなので、向かい風が三ヶ程続いたかと思うと、今度は追い風に切り替わる。この時、上手くりズムを切り替えられれば良いが、向かい風の時に慎重になってしまい、追い風を味方につけてリズムを上げられないとペースは上がってこない。逆に最も危険なのは追い風の時にオーバーペースとなってしまう、向かい風の区間に入った時にブレーキをしてしまう事である。

二つ目の敵は視覚である。ずっと同じ風景が続く為、選手は自身のペース感覚を失ってしまう。正直なところ、過去のデータを見ても本校は「全部の力を出し切れない」事のほうが多い。何故か：これは単独走となった時、距離表示が無い為、自分自身で上手くペースを作れない。逆に、実力以上の力を出してくるチームがある。これは先頭集団に張り付き、そのペース、流れに乗っているからである。駅伝は「流れ」と言われているように、如何に流れに

乗り、良い順位で襷を渡すかにかかっている。三つ目は最も強大な敵である。まさにそれは己自身。「プレッシャー」である。凶太い性格という言葉は久しく聞かなくなった。最近では繊細、草食系男子等と、どこか頼りない感じがしなくもない。それは時代の移り変わりや生活環境、個性の問題なので強要は出来ないが、プレッシャーを逆に楽しむくらいの気持ちでいて欲しい。緊張は誰でもするもの。それを上手くコントロールし、相手に不安を抱えている面を見せない。自分に勝てなくて相手に勝てるはずはない。

## 都駅伝の展望

今年度の東京都駅伝は国学院久我山がリードしている。冬の弥彦駅伝から前哨戦のしらかわ駅伝でも東京勢を寄せ付けない結果を残している。それに続いて去年の優勝校である拓大一高が追い、持ちタイムの速い早稲田実業、安定感のある東京実業、トラックレースで入賞者を多く持つ若葉総合・南多摩、古豪である保善・八王子、エースを要する明大、国立等が全国・関東をかつて争う展開が予想される。

大東一高としては三年生の新井・安田・高橋奥住のエースを軸に、ここに来て急成長を遂げた一年コンビの吉田・荒川、二年代表の橋本悠の成長力をうまく生かしてレースを運びたい。去年は一区の時点で上位校から離されてしまい、四位〜五位を推移するだけとなってしまった。上記にあった「単独走」がほとんどで、勝負する位置で走れなかったこともあり、最大の

力を発揮することが出来なかった。今回は三年生の主軸を前半に配置し、先頭集団で勝負する作戦を計画、そして実行する。

この駅伝に辿り着くまでの一年間、三年生のメンバーは力を出し切るという事が出来なかった。その思いを全てぶつけて、本物の「戦い」をしてもらいたい。冬の八王子駅伝で久我山を震撼させたあの走りを、もう一度見せつけよう。

油断は思わぬ隙を生む。過去、とあるボクシング世界チャンピオンが、同級十位の選手にRでKO負けしたことがある。勝つことだけを考えて練習してきたチャンピオンに、下位ランクが勝てるわけがない。普通なら最初からチャンピオンのペースにはまり、挑戦者は打たれ、倒される。しかし、このときの挑戦者は違った。あくまで己のペースを貫いた。一Rから全力全開で、チャンピオンにペースを作らせなかった。焦ったチャンピオンは挑戦者に大振りパンチを振った。そこにカウンタパンチ：絵に書いたような負けパターンである。

単に隙や弱みに付け込むのではない。冷静に、着実に、且つ大胆に。己の力を出し切ることを考えよう。そうすれば、チャンスはおのずと生まれてくる。

しかし、スタートラインに立つ前の落とし穴にも注意したい。故障はもとより、今年はいんフルエンザという恐ろしいものも潜んでいる。スタートラインに立つまでから、ゴールを迎えるまで細心の注意を払い、何よりも「全力を出し切れる」コンディショニングを行ってもらいたい。

一番悔しいのは力を出せずに負けること。勝負は去年の十一月三日から始まっているのだから。

## 芳賀監督より

いよいよこの季節が廻ってきた。三六回目の都高校駅伝の挑戦だ。過去一勝三四敗だ。競馬の連敗記録で話題になった馬がいたが、三四年間も負けたのだから、その記録を上回るかもしれない。負けが教訓と経験を与えてくれるとすれば、誰よりも教訓と経験を重ねてきたと言えるかもしれない。数少ない勝ちの経験（二〇〇四年の都駅伝優勝、五〇〇〇m競歩三重団体優勝と、自分自身が青森団体、バスケットボール教員の部優勝チームにいたこと）を通じて、一つの共通点を感じている。その共通点とは

- ①競技のスタートラインに着く段階からゴールの瞬間まで競技のみに全神経が集中出来ていること
- ②勝ちも負けも結果を気にせず雑念がない
- ③様々な障害や課題をクリアして感謝の気持ちをもって当日を迎える

という点である。

三年生を筆頭に全員が様々な悩みを乗り越えてここまでこぎつけたチームだ。結果を恐れず勝負のみに集中しよう。

## 当日の連絡

場所：荒川戸田橋陸上競技場

スタート時間：午前十時

集合場所：例年通り第三コーナー奥側

持ち物：大東一高を応援して下さる心

皆様、是非応援の程宜しくお願

い致します。